

戦国の女性たち

中之巻

吉留路樹著



よしとめ／ろじゅ

1925年7月21日生まれ。本籍長崎県。

〔最近の著書〕「馬賊物語」「私鉄への告発状」

「21世紀への海洋開発」

「住宅策戦必勝法」

〔現住所〕東京都練馬区石神井町8丁目32の5

戦国の女性たち（中之巻）

600円（〒70円）

昭和45年6月8日 初版印刷

昭和45年6月10日 初版発行

著 者◎吉 留 路 樹

発行者 岡 本 正 一

発行所 株式会社 霞 ケ 関 書 房

東京都中野区江原町2丁目1番7号

電話 03 (951) 3407

振替 東京 26254番

印刷所 竹内美術印刷株式会社

TEL. 357—7 0 9 7

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします（検印廃止）

0093—701422—0933

戦国の 住たち

中之巻



霞ヶ関書房

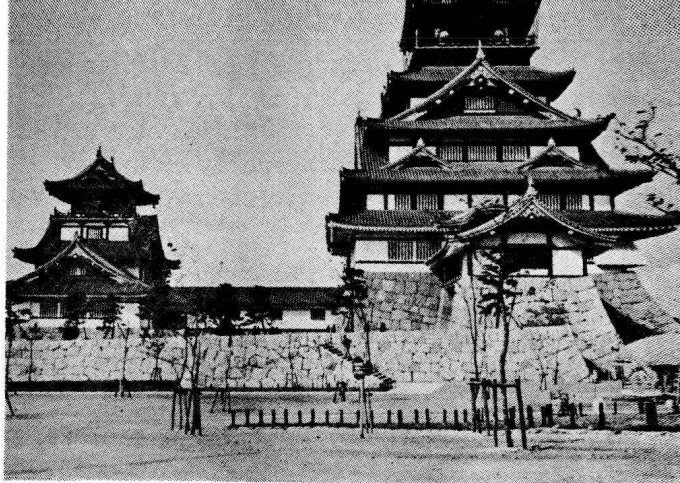


一領具足——高知城

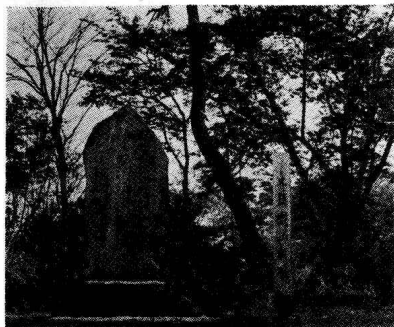
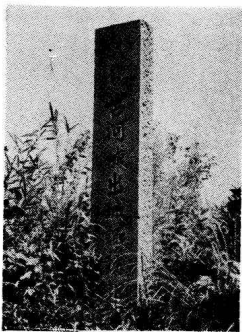
山内一豊の出世をささえた妻の功は、
南国の陽光を浴びて今も輝やく。

（本文P. 137参照）

伏見桃山城（五右衛門の妻参照）



古河城趾（執念参照）



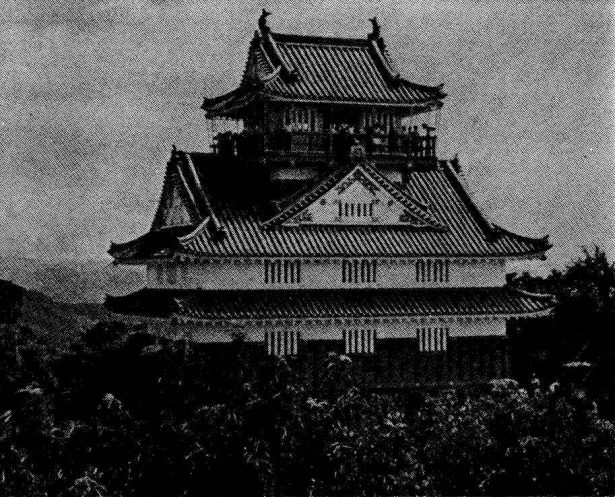
滝山城趾（奥多摩の花参照）



宇都宮城堀（執念参照）

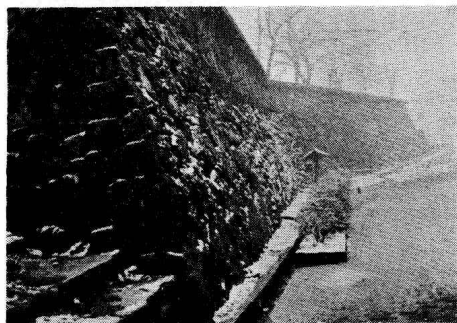
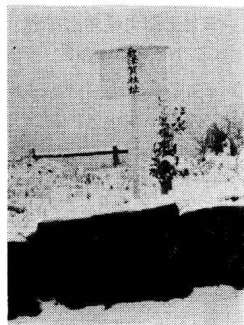
浜松城趾（抹殺者の謎参照）





岐阜城（女の恨み参照）

おつが神社趾（なさぬ仲参照）



磯部堤（新釈・黒い百合参照）

人吉城武者返し（なさぬ仲参照）

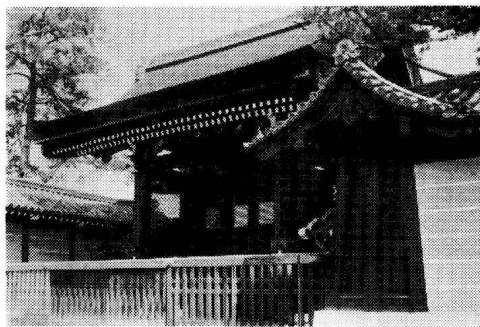
富山城（新釈・黒い百合参照）



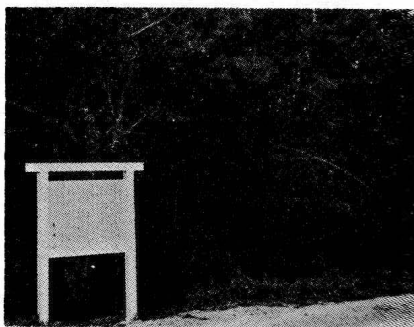
松江城（母の涙参照）



一豊屋敷跡に残る水神宮
（元祖ヘソクリ譚参照）

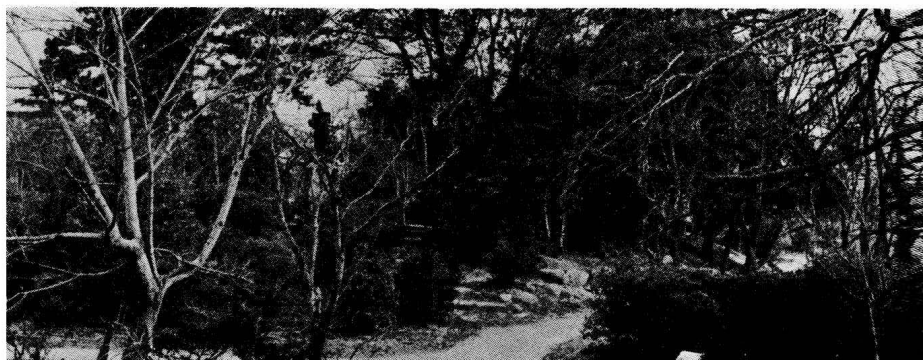


京都御所（狂い咲き参照）



勝竜寺城趾（ガラシャ昇天参照）

清洲城趾（鬼瓦と釣鐘参照）



目次

新釈 黒い百合	………	(富山)	… 9
ガラシヤ昇天	………	(大阪)	… 41
鬼瓦と釣鐘	………	(愛知)	… 75
抹殺者の謎	………	(静岡)	… 95
奥多摩の花	………	(東京)	… 119
元祖へソクリ譚	………	(高知)	… 137
なさぬ仲	………	(熊本)	… 155
女の恨み	………	(岐阜)	… 173
狂い咲き	………	(京都)	… 191

執念……………(朽木)……………209

五右衛門の妻……………(三重)……………229

母の涙……………(島根)……………265

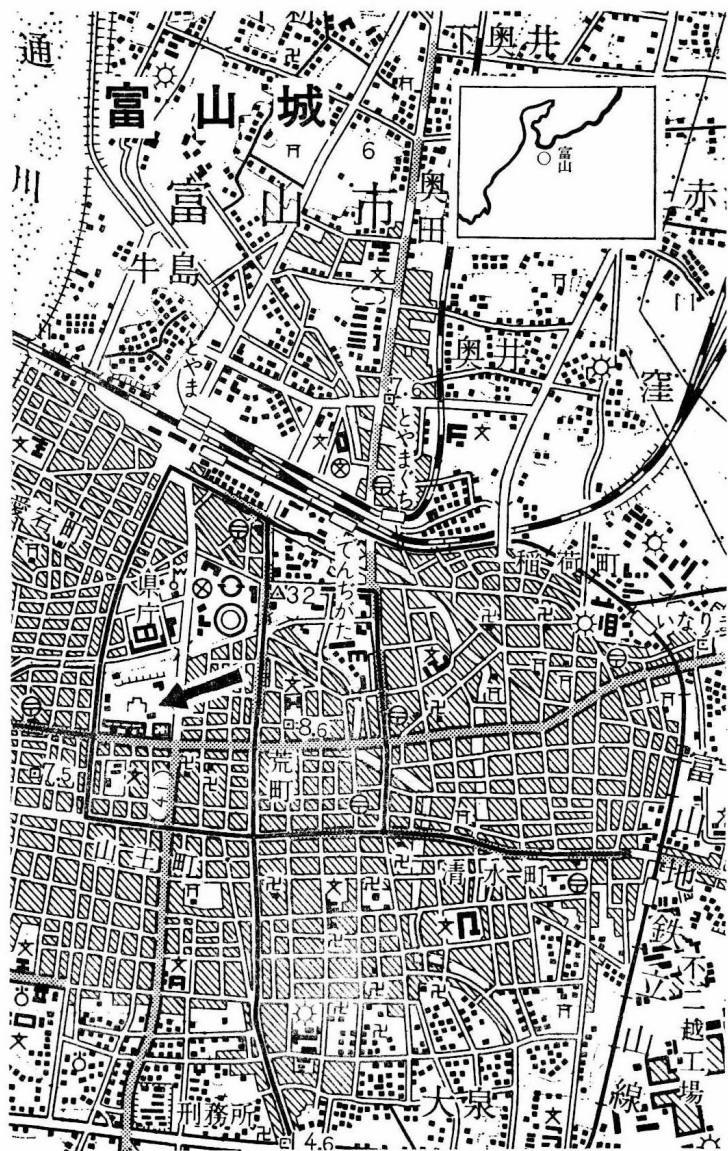
解 説

徳永隆平……………283

挿絵・清水洋子
装丁・清水ゆり子

新
釈

黒い百合



一

白百合の花が部屋一杯に飾られて、芳醇な香りが充満していた。

甘いような、酸っぱいような、花の匂いは夢を湛え、訪れる者の心を和らげる。

「どうじゃ、変りはないか」

陽焼けした顔を綻はこばせて、佐々成政が障子を開けた。

「あ、これは殿——」

花の中に花のような風情の人がいた。彼女は、その名もこの部屋の主らしく小百合という。

「出て参らぬか」

広い部屋なのに、青畳が見えるのは三畳にも満たない。まさに花、花、花の谷間であった。小百合は、成政が手招きした途端、悪戯っ子のように頭かぶりを振って、花の群に姿をかくした。白い花、緑の葉茎が激しく揺れ、その間から黒髪くろかみがのぞいた。

「こやつめ」

成政は手前の白百合を一本引抜き、彼女が姿を没した付近を軽く打った。花卉が二枚飛び散り、淡黄の花粒が虚空で舞う。

「会いたかったぞ、小百合……」

「私も——」

花と葉の間を掻きわけて出てきた女を、成政はいきなり抱きしめた。

「花が、花が折れまする」

小百合は激しく身をもがいた。が、成政は髭面を彼女の頬に押しつけ、次第に彼女を横へずらしたので、近いところの白百合が十本近くも蹴飛ばされた。

成政には奇癖が二つある。

異様なほど白百合の花を愛し、領内立山の高湿地帯に野生するのとは別に、わざわざ畑をつくって栽培をこころみた、これが一つ。残る一つは、こうした外面に現れるものではなく、ときによって、とてつもない想像にとり憑かれる習癖であった。

例えば、合戦の際物見に出した侍が予定の時刻になっても帰ってこないとする。こうしたとき、敵に斃たされたのではないかと考えるのは、別に不思議なことではない。戦死した者の家督を誰に継がすか、葬式はどの程度にしてやるか——など、いろいろと思考を巡らすのも、家臣を抱える武将としては当然であるかもしれない。

が、成政の思索はそのような生易しいところには決して留まらないのである。

誰それは女房と子供が二人残った。女房はまだ若いから後妻にでもやらねばなるまい。子供のうち、男は連れ子して行ってもよいが、娘の方はそろそろ年頃だから、これも嫁にやらねばならぬ。相手には家中の若い者の誰がよいだろうか。あいつには年老いた母が残った。年はいくつであったかな、そろそろ六十三とか言っていた。身分のある者だから、これは奉公にやるわけにも参らない。尼僧にでもするか——いやいや、本人が何と言うか。それとも、百合畑の番人にでもしてやるか。うん、多分この方がましかも知れない。

また、ときによって、彼の朋輩であった旧織田家の武将などから、珍奇な品物が贈られてきたりすると、あいつは一体、何を思っているのか、と考えることから出発して、食い物なら食あたりしないだろうか？ 刀剣武具なら折れはしないか、壊れやすくないかと執拗なほど追及するのである。

追及するといっても、これは彼の心の内的な葛藤であるから、他からは容易に窺えない。

反面、とてつもなく心配の輪を拡げている矢先、物見の者がひょっこり戻ってくると、彼は異常なほど激怒する。それは恰かも、家来が自らを裏切りでもしたかのように、物見の結果が良かれ、悪かれ、いや、そうした報告を聴くより早く彼は怒髪天を突く勢いで、予定時刻に遅れたことを責めたてゐる。

「そちの報告が一刻余も遅れたばかりに、味方が全滅の憂目をみたら何とする。一刻遅れるようであれば、出立に先立ってそれなりの時刻を届けておくものじゃ」

始末が悪いことに、成政はこの時代有数の軍略家であった。従って言うことはまことに理路整然としているので、家来は一言半句の返答も出来ない。だが、しかし、実際は一刻や半刻遅れて戻ったのが悪いのではなかった。

成政自身、想像を發展させ、その心象を拡大してさえないなかったなら、別段叱り飛ばす理由などないのであった。肚を立て、大声を出すことにより、彼は勝手に膨脹させた心象をしぼませ、ようやく冷静さを取り戻す。我儘といえはそれきりだが、多くの武将に持合せのない思索能力が成政にはあったのである。

白百合への愛着はまだ無難だった。けれども、もう一つの奇癖は織田家の部将時代はともかく、独立した一個の戦国大名となつてからの彼には、次第にマイナスとなつて現れてきた。

天正十年（一五八二）六月、織田信長が本能寺で明智光秀に討たれたとき、成政は柴田勝家、前田利家らと共に北越の雄上杉景勝と戦っていた。

彼が本能寺の凶変を耳にしたのは、魚津城を攻略して越後進入の態勢を整えていた矢先であった。奇しくも信長が斃れた六月三日、成政はこの城を陥落させていたのである。

「な、なんと、そりゃまことか——」

彼は愕然となった。彼の思索の涯しなき拡大は、往々にして興奮状態となったとき無遠慮にやってくる。成政は主君なき後の織田家を想った。後継者は信雄か、信孝か——そして、これらを支える柱となるのは柴田勝家か、丹羽長秀か、あるいは滝川一益か。

「羽柴筑前どの、山崎で明智勢を破ったようにござる」

「なに？ 秀吉がじゃと」

二度吃驚した彼は、殆ど信じられない表情であった。このときも、彼はとてつもない考えを飛躍させて胸をときめかせた。

彼が心の中で描いた権勢への夢は愉しかった。彼に限らず、空想の世界は無限に自由だ。

これによると、信長の後継者は信孝であった。そして、この新しい主君の下で、柴田勝家と自分が柱石となり、丹羽、滝川、羽柴の諸将がその支配に従った。

上杉を討ち、北条、毛利を降し、四国平定を終り、信孝の命をうけて勝家は東国を、自分は西国を支配下に置くという夢想である。

この夢は一年近く続いた。しかし、北国富山で妄想を膨らしている間に、現実における天下の大勢は意外な形で推移した。柴田勝家が北ノ庄で自刃し、織田信孝も腹を切ったあと間もなく、彼の目前に巨大な影を伴って立ち塞がったのは羽柴秀吉であった。

成政の夢は白百合の部屋で破れた。花は昨日までと同じように、精一杯花卉を開き、芳醇な香を